

---

# 才能・・・恨み

瀬々菜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

才能・・・恨み

### 【Nコード】

N3538C

### 【作者名】

瀬々菜

### 【あらすじ】

ある、天才女が怨まれていじめられるはなし。そのいじめられっ子が復讐をして・・・？

(前書き)

私が書くのは二作目です。

まだ文章に慣れてないので、

温かい目で見てもらいたいと思います。

それでは、お楽しみください。

怖い………

やめて………

でも、まけたくないよ……

だれか……

タ

ス

ケ

テ

・

・

・

「クラスの中のヒビ」

私、ナカザワユイノ中澤唯瑩。

中学生3年生。

ちなみにクラスは4組。

女バスの部長&ゲームキャプテン。

いろんな高校からスカウトされてて悩み中。。。

自分で言うのもあれだけど、顔も頭もいいほう。

ていうか、いい。

勉強はしてないのに。

毎回期末や中間は3位以内。

って言うてもほとんど1位か2位。

だからといって、暗くて友達がいらないわけでもない。

ていうかむしろ人気なほう？

わかんないけど。

1年だけでこくられた回数は、

13回。

先輩にもこくられました。

2年になったら、

9回？

いや？

1年前もこくつてきたのがいるから……。

8回？

3年では、

12回。

今も後輩にこくられ中。

確かこの子は……。

前に小学校一緒だったようなく……。

ん〜。

ま、いいや。

でもきつぱり断ってるけど。

「好きな人いるから〜。」

って。

いないのに。

「だれ？」

お決まりで聞かれる。

で、お決まりでこう答える。

「ないしょ。」

しつこいのはホントしつこい。

でもねこんな女だから、

ほぼパーフェクト人間ですから、

根暗な女子は怨んでくる。

でも何かをする勇気もないみたい。

うちのクラスは、すっごい分かれてる。

男子と女子が混ざるうるさいAグループ。

ようするに女好きと男好きの集団。

だから私は好きじゃない。

私のいるグループはいつもBグループ。

でもAグループに好かれる。

Bグループは、女子と男子は別々だけど、

それぞれ、明るいけど頭のいい集団。

で、その残りがそちらこちらで固まってるカンジ。

残りは、暗い。

とにかく暗い。

私暗いのってスキじゃない。

こんな・・・性格だからだよね・・・。

でもね？

あんなこと起こると思ってなかった・・・。

（ゲームスタート）

そう、わたしはこの事をゲームイジメといっている。

残酷な、残酷な。

ニンゲンが考え出したゲーム。

その犠牲者が私。

当然の報いね。

誤っても無駄だと思う。

だから気付かないふりをするふりをするの。

全身の力を抜いて。

ふう。

とため息ついて。

落ち着いてさ。

たとえ何かが当たっても気付かない振りして。

でも先生には

「誰かが落としたみたいです」

といつとく。

すると先生は、

「誰が落としたんだ。ほら。」

それで誰が投げたか大体わかる。

消しゴムを取りに来るのは、暗い子達ばかり。

そう。

そのゲームを始めたのは……

根暗な子達。

いくつかのクラスの根暗な子達が集まって、

自分が学校1かわいいと思ってるお嬢様、  
トウジョウナルミ  
東城成美が中心となって。

実際みんなかわいくない。

かわいいと思ったらクロノコナミ黒野小波ぐらい。

でもその子は実際ゲーム（いじめ）はしてない。

見てるだけ。

つまり見てみぬふり。

それも十分いじめだけど……。

ゲーム一科目は、

「塾だから」

っていつて仕事やらせてきた。

それにわざとぶつかっというて、

あたった部分はたいてた。

だから私もはたいた。

小さな声で、

「汚な」

というて。

にらみはせずに。

むしろ清々しい笑顔で。

こわいくらいにね。

二日目からはさ、

中心のお嬢様が金使ったりしてさ、

男とか私の友達とかに無視させてた。

「おはよ」

私が言つとみんな悲しい顔してまた話し始める。

こうなること、わかってた。

でも、つらい。

友達だけは笑うくらいしてくれと思った。

笑っても苦笑い。

陰で・・・悪口とかいってんのかな・・・？

あんなに楽しかった日々が・・・。

今は遠い昔の事のよう。

くそ・・・。

くそ・・・。

何でこんなできる才能を持ってるんだよ・・・!!

そんな才能全部とっていいから・・・。

みんなと仲良くできる日々を返して・・・!!

く流れ星に思いをのせてく

私は最近夜に散歩に行く。

はだしで。

はだしの理由は靴がないから。

正確には汚いから。

私はある川原で寝転んだ。

涼しい・・・。

じっと空とにらめっこしてたら、

何かが流れた。

空に。

そう、

流れ星。

私はねがった。

「このできる才能をすべてとって。みんなとの日々を返して。」

・・・と。

でもこの願いがかなうことは・・・。

なかったんだ。

流れ星なんて嘘ジャン。

そうおもった。

流れ星を信じて、じっくり空を見つめる。

こんなに・・・

こんなにも空は澄んでいて綺麗。

なのになんで・・・？

なんで・・・人はこんなにも汚れているのかな？

同じ・・・地球上のものなのに・・・。

心が空のように澄んでいる人は

この世にいるのかな・・・？

もしいるのだったら・・・。

出会えるといいな・・・。

ううん。

誰だって出会えるよね。

絶対に。

ファサ・・・

ザザ・・・

風で草などが揺れて音が出ている。

なんて気持ちいいんだろうか・・・。

その時・・・。

私の目から一粒の涙が頬をつたう。

それは・・・。

空の澄んでる様子に感動したのか・・・？

それとも・・・。

人のおろかさに涙したのか・・・？

よく、自分でもわからなかった

だけど、ひとつだけ確かなのは・・・

とても綺麗な星が目を刺激したコト・・・

ただ、ただそれだけで・・・。

他はまったくわからなかった・・・。

く醜い人たち

最近すごいひとりぼっち。

でも、私悪いことしてないんですけどね？

わけ、わかんない。

テストなんてテキストにやってるのに全部埋まるし。

そんなとこ変えろって言われても無理なんじゃないかなア？

生き地獄とはこういうものなのか・・・。

改めて思う。

日本は平和。

本当に？

こういうのがあるのに？

少しでもいじめとかがあったら、

それは平和といえるかな？

ちがうよね。

きっと。

でも人間はそういう風に作られちゃってる。

仕方ないといえば仕方ないよね。

でも、これはひど過ぎるよ。

これ以上のイジメもあるけどね。

教室に入ったら雑巾&水入りのバケツが飛ぶ。

ビッチャビッチャになったところで、次。

机に落書きだらけ。

ま、定番だけど。

でも酷いのが、机の中。

よく画鋏や針などが入ってる。

でも前はもっと酷かった。

変な虫が入ってた。

しかもなんか変な液出して、

それがくさい。

それで、

「どっかから変なおいがするなア〜？

くっせえからでてけよ〜!!」

お前が出てけよ。

しかもそれで大爆笑。

貴方たちの笑いのつぼがわからない。

とどめはいす。

座ろつとするとねじが緩んでて、

思いツきり崩れる。

で、また誰かが言う。

「あれ〜？

何で転んだんだよ〜（笑

もしかして体重!?

ごめんごめん。

傷ついちゃいまちたかア〜〜?」

アハハハハッ

みんなが笑う。

てかお前私にこくって来たじゃねえかよ。

「どこの赤ちゃんだよ。」

そう投げ捨てて、トイレに行く。

必ず、トイレに入ったら後をつけてくるんだよね。

で、出る瞬間にホースの水を発射。

特に口の辺りとか狙ってくるし。

最低だ。

人間のグズ。

給食のときは変な消しカスとか、墨スープとか……。

ホントやることない人間ども。

そうだ、いい事思いついた……。

「復讐タイム？」

私は復讐を決心した。

ていうか・・・

真っ正面から面と向き合って話す。

みんなと。

私は、朝早く来て紙のコピーを机に入れた。

もちろんいじめてきた人全員に。

紙の中の内容は、

「放課後

体育館裏

マッテル

3 - 4 中澤 唯桢」

これだけ。

きつとみんな来るはずだ。

一斉に。

だって

1 対大勢

だもの。

これから楽しい楽しい遊びが始まるって言うのにね？

気づいてないんだろっね。

一人でも・・・

戦えるんだから。

フフフ・・・

フフフフフ・・・

みんな手紙の内容見るなり、

「何よこの紙！」

「きつたなー。」

「除菌しないとオー。」

アツハツハハ！！

もうこのクラスはうざい。

いい加減にしてほしい。

でもきつと勝てることないよ？

この、完璧な作戦にね・・・？

誰が残れる人はいるかしら？

楽しみね・・・？

〈放課後〉

みんなが集まる。

もちろん体育館裏に。

運動神経の良い私は、

体育館の屋根のところに。

みんな口々に、

「おっせえなあー！」

「呼び出しといてなんだよ！」

だからそろそろ登場しても良いかなと思う。

さ、楽しい楽しい時間の始まりだよー！！

まず二十本くらいの花火をつけて一本一本投げる。

キヤーキヤー言ってる・・・。

ふふ。

でも、もうそろそろ消火してあげようか？

優しいから消火してあげるよ。

水かけて。

バシヤア！！

「きやア！？」

で、顔をだす。

体育の屋根から。

「悔しかったら上つてくれば？」

もちろん上がってくる人は予想済み。

みんな悔しいから、どんどんおぶって行って、

一人が上るとかそんなことしないでらう。

全員が全員、

「悔しいから私は上る！..！」

と思ってるはずだから。

やっぱり、私の予想通りで。

上ってきた人も、上り方も

ほぼ予想通り。

バカみたいだね。

あんたら。

ほとんど上ってきたのは・・・

Bグループの子達。

男子はもう上る時点ではかばかしいと思ったか、

帰っちゃったから。

で、その女子にさ。

いってやったよ。

「私を友達だと思ってなかったんだね？」

って。

そしたらさ。

「ちがうよ！」

わたしたちは・・・

ただ・・・

ただ・・・。

そこからは黙るみんな。

そんなことわかってたから。

言い訳を必死に考えようとするみんなの姿なんて・・・

想像出来たんだから・・・。

「お金？」

「・・・え？」

「だからあ、お金？」

「な、何のこと・・・？」

「とぼけんなよ!!」

東城から金もらったんじゃないかねえのかよ!？」

「そ・・・そんなこと・・・」

「ホントになかったらハッキリ言っよね？」

「うぐ……。」

また黙り込んでる。

「何円もらったの？」

「……」

「言っよ。」

なに、そんなにいけないことなの？

「ツツ!!」

そっとうわけじゃない!!」

「じゃあ言っよ。」

「一人……。5万。」

はあ。

あきれた。

5万ぽつちで人を無視できるなんて。

腐った人間ども。

「そう……。」

私のこときらいだった?？」

「ううん……。」

大好きだった。

これは、ホントにホント。」

「私も……。」

「私も大好きだった……。」

「何でこんなつまらないことしてたんだろ?？」

「そう……だね。」

何なんだこいつら……。

……本気?

「ふーん。」

でも、私無視されたこと

一生、

一生背負い続けるんだよ?

罪、深いよ??」

「……ゴメン」

ぐずぐず泣きやがった……。

「じゃアさ、これで許してあげ・る。」

「……え?」

「この教科書とかの落書き……

ぜんぶけして?」

「こんなにたくさん……!」

ていつかうちらやってない。。。」

「じゃあ、許さないよ。」

一生、怨み続けるから。」

「わかった……。」

とはいったものの、消すものはない……。

「消しゴム、取りに言って良い?」

「あ?」

「絶対戻ってくるから。」

「いいよ。」

「ありがとう……!!」

駆け出すみんな。

バツカみたい。

こんな友情ごっこ。

私はみんなを手で転がして遊んでる。

遊ばれたから。

みんな戻ってきて必死に消してる。

ほとんど私が書いたやつなのに……。

バツカみたい。

「はい……。」

きれいに……消したよ?」

「ありがとう……。」

「わたしも。」

はい……。」

「うん……。」

みんなを裏切ることになるけど……。

あんたたちだって裏切ったんだからねッ!!

ビリッビビリッ!!

みんな唾然としてる。

フ……。

面白い顔……。

私はノートを破った。

がんばってみんなが消したノートを。

あは……

あはは……!!

アハハハ!!!!

ハ……ハ……。

ナンデ……?

ナンデナノ・・・？

ナンデ・・・

ワタシノメカラ涙ガ？

涙ナンテ・・・ナガスヒツヨウナイノ・・・ニ・・・

ドサツ！

「きゃア~~~~！！」

その時、私は体育館の屋根から落ちた・・・。

脳震盪を起こしていたみたい。

保健室のベットで寝てた私。

私の周りにはなんで・・・

ナンデ先生シカイナイノ？

end \* .

(後書き)

読んでくださりありがとうございます。

人間ってこうみると情けないですね？

私がそんな人間じゃないとは言いません。

というかそういう人間かもしれません。

でも、この文章を読んでくださった

読者様はそうなってほしくないと思います。

いじめられる前に良い友達を。

いじめが始まるのは些細のコトですから。

知らないうちに・・・

もあるので、その前に良い友達を持つのが一番ですね。

読んでくださりありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3538c/>

---

才能・・・恨み

2010年10月11日16時05分発行